



●城一夫名誉会員を偲んでー1

城一夫著 「時代別 日本の配色事典」
パイインターナショナル発行 3,850 円
2020 年 4 月 19 日初版

古代から江戸時代まで時代別に整理された日本の伝統色と配色を堪能できる事典です。

事典と言っても、B5 判変形のソフトカバーで扱いやすく、特徴として古代から始まっているところに著者の視点を感じます。

色彩認識の目覚めに着目し、日本人がどのように、どんな色を認識したのかが書かれています。

巻頭に「キーワードでたどる色彩史」という年表が写真や色票と共に掲載されていて全体像が一目でわかりやすく示されています。各時代は年表から始まり、時代の色彩と配色の 2 部構成です。共に、解説と色票を添えた伝統色名や資料の写真が豊富に掲載されその時代の色彩を知ることができます。

巻末に、文中の伝統色名の色票と同じく、配色に使用した色票、マンセル値、CMYK 値、RGB 値、Web 値が記載され、更に、本文中の伝統色名と人物別の索引もあるので引きやすい事典です。読みものとしても知識を深められ、江戸時代までの日本の色彩文化事典ともいえる名著です。 (園田好江)

源氏物語の色 -43 「幻」

最愛の妻である紫の上が亡くなった翌年の正月、光源氏は新春を迎えても、未だ悲しみで気分が晴れぬ様子である。

長年紫の上に仕えてきた女房たちも濃い墨染(すみぞめ)の色の喪服を着て、紫の上を偲んでいるとある。墨染は墨で染めた様な黒色や灰色を表し、喪服、喪中の調度、僧や尼の衣服などに用いる。

この帖では、この年の毎月の出来事や心情が歳時記風に記されている。

四月、召人である中将の君が東の間でうたたねしているところに、光源氏が近づくと小柄で美しい中将の君は恥じらいながら起き上がる。その衣服は「紅の黄みがかかった色の袴に、萱草色(かんぞういろ)の単衣(ひとえ)、たいそう濃い鈍色に黒などを重ねて着て」とここでも紫の上の裳に服する衣服の記述がみられる。

鈍色や黒は喪服を示しているが、萱草色も喪服に多く用いられた色で、その染料は、梔子、黄檗(きはだ)と紅花、蘇芳と明礬(どろき)など、所説ある。

十二月、晦日(つごもり)の日、心細い想いを詠んだ光源氏の歌に、その命の尽きる時が近づくのを感じさせられる (平山和香子)

●大辞泉ひろいよみ 9ーい

色は思案の外(ほか)：男女間の恋情というものは常識では判断しきれないということ。恋は思案の外。

色も香もある：美しい容色も、床しい情愛もある。名実、または情理を兼ね備えている。花も実もある。

色を失う：心配や恐れなどで顔が真っ青になる。意外な事態に対処しきれないようす。

色を売る：売春をする。色をひさぐ。

色を替え品を替える：あらゆる手段を用いる。手を替え品を替える。

色を損ずる：不機嫌な顔色になる。怒る。

色を正す：あらたまつた顔つきをする。ようすをきちんと正す。

色を作る：化粧をする。艶めかしく装う。人の気を引くような様子をする。

色をなす：怒って顔色を変える。

色合(い)：色彩のぐあい。色の加減。色調。物事の感じやぐあい。傾向。顔の色つや。顔色。

色揚げ：染色などで、色の染め上がりぐあい。

色悪：(いろあく)歌舞伎の役柄の一つで、外見は二枚目で、性根は悪人の役。いろがたき。女性を迷わせてもてあそぶ男。色魔。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)